

許嫁いいなづけの死

野村胡堂

—

「親分、小柳町の伊丹屋いたみやの若旦那が来ましたぜ。何か大変な事があるんですって」

「恐ろしく早いじゃないか、待たしておけ」

「へエ——」

平次は八五郎を追いやるように、ガブガブと嗽うがいをしました。美しい朝です。鼻の先がつかえる狭い路地せまの中へも、金粉を撒ま

き散らしたような光が一パイに射して、初夏の爽やかさが、袖にも襟にも香りそう、耳を澄ますと明神の森のあたりで、小鳥が朝の営みにいそしむ囀りが聞えます。

こんな快適な朝——起き抜けの平次を待ち構えているのは、いったいどんな仕事でしょう。血腥い事件の予感に、平次はちよつと憂鬱になりましたが、すぐ気を変えて、ぞんざいに顔を洗うと、鬢を撫で付けながら家へ入って行きました。

「親分、た、大変なことになりました」

伊丹屋の大身代を継いだばかり、まだ若旦那で通っている駒次郎は、平次の顔を見ると、上がり框から起ち上がりました。少し

華奢きゃしゃな、背の高い男です。

「駒次郎さんかい、——どうしなすったえ？」

万両ぶげん分限の地主の子に生れた駒次郎は、この春伊丹屋の主人になつて、尤もっともらしい尾鰭おひれを加えたにしても、平次の眼にはまだ道楽者の若旦那でしかなかつたのです。

「皆んな、隠せるものなら隠す方がいいって言いますが、私はあんまり口惜くやしいから、親分の力を借りて、下手人げしゅにんを見付け、二度とそんな事のないようにしてやりたいと思います」

駒次郎は、女の子のように、少し品を作ってお辞儀じぎをしました。

色の白さも、襟すその青さも、裾すそを引く単衣ひとえの長さも、そのまま芝居

に出て来る二枚目です。

「隠すの、下手人の——って、いったいそれは、どんな事で？」

「親分、聞いて下さい。ゆうべ向柳原の十三屋のお曾与とみやが殺され

ましたよ」

「えッ」

「母親といっしょに風呂へ行った帰り、——と足先に帰って来たところを路地の中で絞しめられて——」

「それを隠しておく法はない、誰がそんな事を言い出したんだ」

「私の家の番頭たちが言い出し、十三屋とみやへは金をやって、うやむやにするつもりでした」

平次も驚きました。向柳原の名物娘が一人、絞め殺されて死んだのを、うやむやに葬ほうむるといふのは、あまりと言えはわけが解らなさ過ぎます。

「十三屋のお曾そよ与は、お前さんところへ嫁入りする筈だったじゃないか」

十三屋の文吉が、娘のお曾与を伊丹屋いたみやに嫁入りさせることになつた話は、平次の耳にもよく聞えていたのです。

「そうですよ、祝言は三日の後——この二十五日ということになつていました」

駒次郎はいかにも口惜くやしそうです。

「なるほど、そいつは気の毒だ」

「番頭や親類が集まって、——こんな噂がパツと立って、万一呼売の瓦版にでも刷すられたら、伊丹屋の暖簾のれんに疵きずが付く、それよりは金で済むことなら、十二屋へ金をやって、内々にするがいいと、こう言います」

「無法な人たちだな」

「でも私は口惜しくて口惜しくてたまりません。嫁を貰うのを一々怨まれちゃ、やり切れないじゃありませんか。この先もあることですから、どうぞ下手人をあげて、お処刑しおきに上げて下さい、親分」

「お前さん、怨まれる心当りがあると言うのかえ」

「――」

駒次郎は黙ってしまいました。が、この様子では、金があるに任せて、飛んだ罪を作っているのかもわかりません。

「八、一と足先に行つて見てくれ。怨まれる筋があるそうだから、思いの外手軽に下手人の当りが付くかも知れない」

「へエ――」

八五郎のガラツ八は、伊丹屋の駒次郎を促して、一と足先に出

て行きました。後には平次、悠々と朝飯にして、お静と無駄を言

いながら、陽の長けるのを待つております。簡単に埒があきそう

な事件を、なるべくガラツ八に任せて、手柄をさせようという心
持でしよう。

二

まもなく八五郎が帰って来ました。

「親分、済まねえが、ちよいと知恵を貸して下さい」

「何だ、もう見当が付く頃じゃないのか。嫁入り前の娘を殺す奴
は、たいてい極っている筈だ」

「それが一向決っていないから不思議で——」

「どうしたんだ」

「下手人の匂いのするのが多過ぎるんですよ、親分」

ガラツ八は事件の外貌がいぼうを一通り説明しました。

娘の親の十三屋とみや文吉というのは、向柳原の毛虫のように思われ
ているかれこれ屋で、十三屋じゃない千三つ屋だといわれる五十
男、娘のお曾与そよが不思議に美しく生れついたのでを利用して、一番
有利な取引を心掛け、とうとう小柳町の万両分限ぶげん、伊丹屋駒次郎
の嫁にするとところまで漕ぎつけたのでした。

許嫁の死

伊丹屋の先代、——この春死んだ駒次郎の父親が生きていたら、
この祝言は成立たなかったでしょう。十三屋文吉のような、評判

の悪い男の娘を嫁にすることは、お曾与がどんなに良い娘であつたにしても、大地主で旧家きゆうかで、神田で何番と指を折られる格式の伊丹屋に取つては、まことに我慢のならない事だつたに違いありません。

駒次郎はまた典型的な道楽息子で、八五郎の言葉を借りて言え
ば、

「あれは馬鹿野郎ですよ、金で世間の女が何うにでもなると思つてやがる、——その金で自由になつた女が、皆な自分に血道ちみちをあげると思い込んでいるから凄まじいすきじゃありませんか。だから、お曾与殺しの下手人が拳あがらなきや、神田中の綺麗な娘が、種切れ

になると、大真面目で思い込んでやがるから世話はない」

こう言つて、ペツペツと唾つばを吐くのです。

「八、その家の中から庭へ唾を飛ばすのだけは止してくれ。たいそう見事な芸当だが、千番に一番間違つて、畳へ落ちた日にや、おもてがえ表替でもしなきや追つつくまい」

「へッ」

八五郎はポリポリと鬢びんを搔きました。

「ところで話の続きはどうした」

「そこで、十三屋とみやへ乗込んでお曾与そよの死体を見せて貰つたが——
親分、良い心持のものじゃないね、あの子こが達者なときはたまに

からかつても見したが、駒次郎という大きな餌えさに喰い付いているせいか、こちとらには鼻汁はなも引っかけなかつた娘だが、死んで見ると可哀想だ」

「無駄はいい加減にして、それから何うした？」

「娘は路地の外で殺されていたのを、一足ひとあしおくれて帰って来たお袋が、つまずいて気がついた、まだ月は出なかつたし、ゆうべは自棄やけに暗かつた」

「――」

「起して見ると、自分の娘のお曾与が、白木しろきの三尺で絞め殺されている――」

「白木の三尺？」

「その三尺は誰のだと思います、親分？」

「下手人ではないことだけは確かたしだろうよ」

「えらいッ、さすがは銭形親分だ」

「馬鹿だなア」

「その三尺の持主は、同じ町内のやくざ野郎で、勘三郎のものと知れた」

「あの、大工くずれの？」

「しめたと思ったから、飛んで行って勘三郎を挙げるつもりだったが、いけねえ、——肝心の勘三郎は、三日前から霍乱かくらんに罹かかって、

死ぬような騒ぎだ」

「本当か」

「吐く瀉はくたすで、げっそり痩せているから、嘘うそじゃないでしょう。

妹のお袖が、枕元に附きっ切りで介抱だ」

「フーム」

「そのお袖がまた、殺されたお曾与の前に、駒次郎と評判が立っていたというから因縁いんねん事じゃありませんか」

「フーム」

「その上兄の勘三郎は、お曾与そよと仲が良かった。伊丹屋へ嫁に行く話の始まる前は、妹のお袖の友達でもあり、ツイ冗談の一つも

言い合つた仲だといふから、どんな事がないとも限らない」

「それつ切りか」

「まだありますよ、親分、伊丹屋の馬鹿野郎は小唄の師匠のお舟の世話も焼いていた」

「そんな話を聞いたこともあるようだな」

「月々かなりのものを仕送って、おおかみ狼連が帰ると、長火鉢の猫板の上へ、長い頤を載つけておいたって言うじゃありませんか」

「まだ続いているか」

「お曾与の話が始まってから、手切の金をやって、綺麗に切れたとは言ってますがね」

「フーム」

「当てになつたものじゃありませんや。すると、お曾与を殺しそ
うなのは、勘三郎と、その妹のお袖と、師匠のお舟と——」

「勘三郎とお袖でなきや、お舟に決つたようなものじゃないか」
と平次。

「ところが、お舟も昨夜はゆうべ一と足も外へ出ねえ」

「はてな？」

「お舟のところに居候いそうろうしている和助——従兄いとことか何とかいう、不
景気な野郎を親分は知りませんか」

「知らないよ」

「三十がらみの青瓢箪野郎で、あおびょうたん大きな声で物も言えない、物の汚し点か、影のような野郎ですよ、——その和助が言うんだ、お舟さんはゆうべ一と足も外へ出ねえ——と」

「勘三郎とお袖は兄妹だろう」

「へエ——」

「お舟と和助も、従いとこ兄妹同士か何かだ。二人ずつ相談して口を合せたら、どんな嘘でも通るじゃないか」

「だから親分行って見て下さい。あつしじゃ、この上の見当が付かねえ」

八五郎は正直に投げ出してしまったのです。

平次は大きな舌打したうちをして、十手を懐にねじ込みました。鼻がよくて、いろいろの消息を嗅ぎ出すことにかけては、天稟てんびんの妙みょうを得たガラツ八ですが、理詰めりづめに手繰てって、下手人ほしを挙あげることとなると、まるでだらしがありません。

まず一番に小柳町の伊丹屋へ行つて見ると、本人の駒次郎以外は、お曾与を嫁に迎えることに賛成なのは一人もありません。

駒次郎に逢つて聞くと、

「お曾与は良い娘でしたよ、生一本で、情が濃こまかくて——」

そんな事を言うのです。

「お袖やお舟を捨てたのはどう言うわけで？」

平次はこんな事まで突っ込むのです。

「お袖は兄がいけない、あの勘三郎は親類附合の出来ない男ですよ」

「お舟と手を切ったのは？」

「あの女には虫が付いている、私はいつ寝首ねくびを搔かかれるかわからない——あんな怖い女はありませんよ」

平次はこれ以上聞くこともありませんでした。自惚うぬぼれが強くて、

薄情で、臆病で、欲が深くて道楽の強そうな駒次郎は、平次に取つても、一番嫌な相手だったのです。

十三屋とみやへ行つて見ると、まだお曾与の死骸の始末もせず、父親の文吉と母親のお倉は際限のない涙にひたつて居りました。

「親分さん、敵を討つて下さい。娘をこんな目にあわせた人間を、八つ裂やぶきにも火焙ひあぶりにもして下さい」

父親の文吉は娘の死骸を見せながら、気狂い染じみた事を言うのです。

「下手人はすぐ挙げてやるが、いったい誰がこんな事をしたんだ、心当りでもあるのかい」

と平次。

「心当りはうんとありますよ、親分。伊丹屋の旦那のところへ嫁ゆきたかったのは、この界限でも、五人や三人じゃありません」

「そのうちでも、諦あきらめたのと、諦め切れないのがあるだろう」

「お袖や、お舟は諦められない口です」

「それから」

「娘を追い廻していたのでは、お袖の兄の勘三郎という野郎があります。あの野郎なら殺し兼ねません。恐ろしく無法な奴で——」

文吉の呪のろいは果てしありません。

平次はお曾与の枕元に線香を上げて、そこそこに不快な空気か

ら遁のがれ出ました。

その次に訊ねたのは、小唄の師匠のお舟、何とかいう名取りですが、昔から知っている平次には、唯の新造のお舟のような気がしてなりません。もう二十七八にもなるでしょうが、若くて、意気で、美しくて、何となく心ひかるる含蓄がんちくがあります。

こんな透すき徹とおるような感じの女が、どう間違まちがって伊丹屋の駒次郎などの思い者になつていたことか、平次にはそれが不思議でありません。

「あら、銭形の親分さん」

お舟は屈託くつたくのない様子で迎えました。

「お舟、お曾与そよが殺されたことは聞いた筈だな」

こう言う平次は、自分ながら職業的な嫌味を自分に感じておりました。

「え、お気の毒ねエ」

「お前もそう思うか」

「まア」

「お曾与には怨うらみがあつたんじゃないか」

「飛んでもない。伊丹屋の若旦那と手が切れて、私は清々していただきますよ」

「本当かい、それは？」

「嘘なら、今日にも伊丹屋の若旦那と撚よりを戻しますよ、——でも、私はもう真まことつ平御免蒙まうります」

「大層な見切りようだね」

「世の中に、色男面をする人間ほどイヤなものはありません。本人はお曾与さんと祝言をしたら、江戸中の女は半分位くび頸くびでも縊くるだろうと思っくているでしょうが——」

「手巖いしいな、お舟」

平次も、お舟の気焰きえんには少したじたじと来きました。

「だから、お曾与さんを殺したのが、伊丹屋の若旦那に振り棄すてられた女の怨うらみだと思おもつたら大間違ちがいさ、——金さえあれば、どん

な事でも出来ると思うような男に、女は夢中になるわけはない——金より外に何んにも持っていない男のために、人殺しまでする女がこの世の中にあるでしょうか」

「そう言ったものかも知れないな。ところで、お前はたいそうな手切金を貰ったという話じゃないか」

平次は話の方向を変えました。

「え、——まあまああの吝しわ坊ぼうにしては、清水きよみずの舞台から飛降りたつもりでしょうよ」

「いくらだ」

「五十両」

「ほう、それは大金だ」

「五十両も出さなきや、私は頸でも縊ると思つたのでしよう」

「ところで、昨夜お前は一と足も外へ出なかつたと言つたそうだが、本当か」

「出やしません。日が暮れるとお稽古けいこがなくなつたから、早御飯にして、和助さんと無駄話をしたり、ウンスン歌か留多たをやつたり、亥刻よつ前に寝てしまいましたよ」

「和助というのは？」

「私の遠い従兄いとこですよ、——ちよいと、和助さん、銭形の親分さんに御挨拶をしておくれ」

「――」

お舟に呼ばれて、黙って出て来たのは、本当に物の汚点しみのよう
な男でした。恐ろしく高い背を二つ折にして歩くので、せむし 僂せむしのよ
うに思いますが、別に不具かたわな様子はなく、竹のように長くて武骨
な手足、白痴はくちのように陰気で無表情な顔、油まげっ気のない鬚まげ、どこ
から見ても、お舟といつしよに置いて、『男性』の不安を感じさせ
るような人間ではありません。

弟子たちの下足を揃えたり、水を汲んだり、使い走りをしたり、
下女に手伝ぞうきんがけって雑巾掛ぞうきんがけをしたり、お舟に取っては、色気がないだ
けに、申分のない用心棒でもあったのでしよう。

「ゆうべお舟はどこへも出なかつたね、和助」

平次は声を掛けました。

「へエ——、私も師匠も、ここから外へ——と足も出ませんよ」

そう言つて和助は敷居を指すのです。

「下女は？」

「母親が病気で三日前に房州へ帰りましたよ、——今日は戻る筈ですが」

お舟は何のこだわりもありません。

四

平次とガラツ八は、その足をすぐ勘三郎の家へのしました。

「病気だつて言うじゃないか、どんな具合だい」

浅間な家、木戸から入つて声を掛けると、

「あつ、銭形の親分」

勘三郎はあわてて床とこの上に起上がりります。

「起きなくたつていいよ、そのまま構わない」

「へエ——」

「お前は飛んだ仕合せだったよ、ピンピンして居て見ねえ、今ごろは無事じゃ済まないよ」

「お曾与の阿魔あまが殺されたんですってね、好い気味見たいなもので」

「何て口のききようだ」

「へエ——」

平次にたしなめられて、勘三郎は頭をかきました。

三日寝ていたという糞やつれはありますが、二十五六の小意気な男で、伊丹屋の糝粉細工しんこざいくのような若旦那よりは、江戸の町娘には好かれそうです。

「腹を悪くしたそうじゃないか」

「なアに、大した事はありませんよ。両国でさんざん泳およいだ上、

すいか たらふく
西瓜を鱈腹やっただんで」

「それじゃ腹をこわさねえ方が不思議だ」

「相済みません」

「俺へ詫びなくたっていい。ところで、お曾与殺しに、何か心当りはあるかい」

「大ありですよ、誰もあの阿魔あまを締め手がなきや、あっしがやるつもりだったんで——」

「まア、兄さん」

妹のお袖は側からあわてて止めました。十九——殺されたお曾与よりは一つ年下ですが、荒っぽい兄の勘三郎に似ぬ、露草つゆくさの紫

の花のような淋しい娘です。

「大丈夫だよ、銭形の親分さんは見通しだ。思う存分な事を言わない方が、反かえって隔へだてがあつていけねえ。ね、親分。そうじゃありませんか」

「その通りだ、気の付いた事は何でも言ってくれ」

「千三つ屋の文吉奴、自分のとこの七つ下りの娘を伊丹屋いたみやへ押付けたいばかりに、ひどい罪を作っていますぜ」

「フーム、どんなことをしたんだい」

「あ、っ、の妹と伊丹屋の若旦那と心易くなつた時は、お袖には勘三郎というやくざな兄が附いてるから後が怖いとか、お袖の血筋ちすじ

には、悪い病やまいがあるとか——いろんな事を、伊丹屋にたき付けた
そうですよ。お師匠のお舟さんだつて、同じような目に逢つてま
すよ、あの女には隠し男があるとか、あとでお店たなへ行つて尻をま
くる奴があるかも知れないとか——嫌な千三つ屋じゃありませ
んか、あの野郎こそ、嘔吐つきで、胡麻摺ごますりで、手癖が悪くて、瘡かさつ
かきで、——伊丹屋の若旦那の古いアラを捜して、振、つてばか
りいるそうで——」

「まア、兄さん」

お袖はまた止めました。

「ところで、昨夜ゆうべはどうしていたんだ」

平次は話題を変えました。

「へッ、あんまり景気の良い話じゃありませんが、雪隠へお百度せっちゃんですよ」

「今日は」

「ようやく落ち着いてこの通り、——おんじやく温石を三つ下っ腹へ当てていきますよ、こいつは楽じゃありませんぜ」

そう言えば、少し逆上のぼせしている様子です。

「お曾与を絞めたのは、お前の三尺だって言うじゃないか」

「呆れてしまいましたよ、親分。俺の三尺なんか盗みやがって手数のかかる野郎じゃありませんか」

「その三尺をどこで盗まれたんだ」

「町内の湯屋で——と月も前ですよ。昼湯につかって、良い心持に唸うなっていると、どこの野郎か知らないが、あっ、しのの三尺を締しめて行つちまいましたよ」

「代りはなかったのか」

「へエ」

「帯を締めずに来たのかな」

「あっ、しのの白木の三尺を、博多はかたの帯とでも間違まちがえたんでしょう」

「その時いっしょに風呂へ入っていたのは誰だい」

「二三人いたようですが、しばらくざくろぐち柘榴口から出ずに、夢中で喉のど

を聞かせていたから、どんな野郎がいたか、ろくに見やしません」
ありそうもない事ですが、勘三郎らしい無頓着さでもあります。
これ以上には訊くべきこともありません。

そこを出た二人。

「おどろいたね、親分。お舟でなくお袖でなく、勘三郎でなきや、

——流しの追剥おいはぎか、気違いじゃありませんか」

ガラッ八はこんな事を言うのです。

「流しの追剥や気違いが、勘三郎の三尺をわざわざ用意するもの
かい」

「なるほどね」

「無駄を言わずに、お舟の家の近所の食物屋を一軒残らず当って見るがいい。下女が房州へ帰っていると言うから、ゆうべあたりは店屋物を取つて^{てんやもの}いるに違げえねえ。蕎麦屋^{そばや}でも小料理屋でもいい、ゆうべあたりお舟のところへ何か出前物を持込まなかつたか、持込んだ時、お舟と和助が確かに^{たし}いたか、それを訊き出すんだ、——それから、酒屋も訊いて見るんだぜ、いいか」

「心得ているよ、親分」

八五郎はポンと胸を叩きました。勘三郎の病氣はニセでなく、三尺帯が勘三郎のに相違ないとすると、お曾与殺しの疑いは、まっすぐにお舟に掛かるわけです。お舟と和助と口を合せて、不^ア

在証明リバイを作らないとも限らないわけですから、平次はその裏を搔ゆうべいて、昨夜お舟の家を覗いた者を捜し出そうとするのです。

平次はガラツ八に別れて町の湯屋へ行きました。

「一と月ほど前に、勘三郎が白木の三尺を盗まれたそうだね」
番台のお神さんに訊くと、

「そんな事がありましたよ、——板の間稼かせぎはよくあることです
が、あんまり新しくない三尺を盗んで行くのは変じゃありません
か」

「その時、男湯へ入っていたのは誰だい」

「横町の古着屋の隠居と、町内の手習師匠と、——三尺には用の

ない方ばかりでしたよ」

「それだけか」

「小柳町の伊丹屋の若旦那が入っていました」

「珍しい人だね、小柳町は遠過ぎるじゃないか、それに、伊丹屋なら内風呂うちぶろがあるだろう」

「師匠のところ——親分も御存じでしょう、お舟さんのところへ入浸いりびたっている頃は、伊丹屋の若旦那がよくここへ見えましたよ」

「なるほど」

そう言えばいつこう不思議はありません。

平次はそんな事で諦あきらめて帰って来ると、それから一刻ばかり

経って、ガラツ八は息せき切って飛んで来ました。

「親分」

「どうした、八」

「変なことがありますよ、——あの町内の蕎麦屋そばやで訊くと、ゆうべお舟のところ、たしかに蕎麦を二つ取ったと言うんで——」

「フーム」

平次の見当は見事に当りました。

「ところが、不思議なことに戌刻いっく少し前に持つて行くと、お舟も

和助も——二人共いなかったと言うじゃありませんか」

「それから半刻ばかり経って入物いれものを取りに行くと、お舟と和助はどこからか帰って来て、二人そっぽを向いて坐っていたというじゃありませんか」

「蕎麦は？」

「その時はまだお勝手口においたままで、念のために蓋ふたをあけて見ると、手もつけずに、伸のびていたんだそうで——」

「八、来い」

「親分」

平次は猛然と起たちあ上がりました。つづく八五郎。

五

「お舟、——昨夜どこへ行つた」

平次はお舟の家へ取つて返すと、八五郎に裏口を見張らせて、ズイと入りました。

「あ、親分さん」

「先刻は、よくも俺を騙したな、ゆうべ酉刻半過ぎから戌刻過ぎまで、この家に二人ともいなかつた筈だ」

平次は入口を背にして、お舟と和助の方へ詰め寄りました。

「親分さん、済みません」

お舟はガツクリ頭を垂れます。大きな牡丹ほたんが、土に落ちて砕くだけた風情です。

「手数をかけずに、本当の事を言っちゃどうだ」

「恐れ入りました、親分さん。お曾与を殺したのは、この私に違いありません」

お舟は畳に手を突きました。

許嫁の死



©2017 萩 柚月

「違うよ、——お舟さんじゃない。——お曾与を殺したのは、この和助だ、——私だよ、親分」

汚点しみのような男——和助は長身を起しました。青い顔に血が上つて、この影のような男にも、若い情熱のあることを、平次は不思議な心持で見えております。

「あれ、そんな事を言つて、和助さん」と隔へだてるお舟。

「いえ、親分、——お舟さんは人などを殺せる女じゃない。お曾与を殺したのは、全くこの和助だ、——私がそつと家を出たのが酉刻半頃、——その時分お曾与が湯屋へ行くのを知っているから

だ」

と和助。

「お前にはお曾与うらみに怨うらみがなかつた筈だ、出鱈目でたらめな事を言つちやならねえ」

平次は和助の白状を相手にもしません。

「親分、聞いて下さい、こうなりや、皆んな言つてしまいます。そして立派にお処刑しおきを受けます」

和助は激情ふるに顫えながら、平次の前に手を突きました。

「――」

ジツとそれを見詰める平次、お舟も呆気あっけに取られて黙ってしま

いました。

「私はこの通り、見る影もない人間だ。ね、親分。お舟さんが、寄り所のない私を引取って、ここへ置いてくれるのは、私を男の切れっ端とも思わないからだ、——多勢の弟子たちだって、私を六十七の年寄のように思っている。私は結局それをいい事にして、人目に立たないようにその日その日を送っている——」

「——」

「でも、私も男だ、——まだ三十を越したばかりの若い男だ。遠い従妹いとこのお舟さんの、人並すぐれて綺麗なのや、情け深いのを見て、木や石のような心持でいられるわけはない。私の心はどうか

ら火のように燃えている——」

「——」

和助の言葉も火のように燃えました。この汚点しみのような男に、こんな情熱があらうとは、いつしよに暮しているお舟も全く気が付かなかつたのでしよう。思いもよらぬ生命の点ぜられた男の顔を見詰めるばかりです。

「伊丹屋いたみやの若旦那に捨てられてから、お舟さんの悲嘆は、この和助がよく知っている、——負けん気のお舟さんが、口では強いことを言いながらも、人の見ぬところでは、毎日泣いて暮していた。息も絶え絶えに泣いて居ることさえあった。伊丹屋の若旦那が何

も彼も金で済したつもりで、五十両の手切てぎれをよこした時は、お舟さんは大喜びで受取りながら、使の者が帰ると、その金を庭に叩きつけた。この私に掃溜はきだめへ捨てるという大むずかりだ、見るのもイヤだと言った」

和助の言葉の激しさ。が、それがことごとく事実だったのでしよう。お舟は襟に顔を埋めて泣いております。

「伊丹屋の若旦那へ、ある事ない事た焚きつけて、お舟さんとの間を割いたのは千三つ屋の文吉だ。私は文吉が憎かった、お曾そよ与も憎かった。どうせ私のようなものを、男の切れっ端とも思ってくれないお舟さんのために、私はこのお舟さんの怨うらみをそつと晴らし

てやろうと思つて、——ゆうべ、お曾与が湯屋から帰るのをつけて、あの路地の中で絞め殺したのは、お舟さんの敵を討つため、文吉に思い知らせるためだ——親分、これで判つたでしょう。さア、私を縛つて下さい。お舟さんに罪はない、——私も隠せるものなら隠し^{おお}了せるつもりだったが、お舟さんが私を庇^{かば}つて、自分で罪を背負^{しょ}いそうじゃ、もう我慢が出来ない」

「——」
「親分、縛つて下さい、さア」

和助は自分の身体を、平次の方へすり寄せて、両手を自分から後ろに廻すのです。

「和助さん、お前、それは本当かい」

お舟はようやく顔を挙げました。

「本当とも」

「堪忍しておくれ、——私は何という馬鹿だろうねえ。そんな立派な男が自分の側にいるのも知らずに、——あんな糝粉しんこざいく細工のような金持の若旦那なんか未練を残して、——」

「お舟さん」

「有難うよ、和助さん」

お舟は膝いざり行寄って、和助の激情に顫える手を取るのです。涙はお互の顔も見えないほど降りそそぎました。

「よしよし、いい心掛けだ、——ところで和助、——お前はお曾^そ与^よを殺したに違いあるまいが——何で殺した」

平次は静かに問いました。

「三尺ですよ、親分」

「どんな？」

「白木^{しろぎ}の三尺で」

「そいつはお前のか」

「え」

「ところで、お前は三尺を何本持っている」

「二本持っていますよ」

「今締めているのが一本、あとの一本でお曾与をしめたわけだな」
そう言う平次の言葉や眼色を読むと、ガラツ八は飛んで行って、
横手の押入から行李こうりを一つ出しました。

「こいつは和助の行李だろう」
と平次。

「え」

お舟は僅かにうなず頷きます。

平次の指図で八五郎が蓋を取ると、中には着物が二三枚、股引ももひき、
腹掛、手拭の外に、白木の三尺が一本入っているではありません

か。

「これは何だ」

と平次。

「もう一本ありましたよ、親分」

和助はへドモドします。

「和助、気の毒だが、お前が下手人げしゅにんじゃないよ」

「――」

「下手人は、勘三郎の三尺を盗んで、それでお曾与を殺したんだよ」

「それが」

「まあ聞け、その三尺は町内の湯屋で盗まれた品だ」

「私ですよ、親分。私が勘三郎の三尺を盗みましたよ」

と和助。

「いつの事だ」

「三日前で——いや五日位前ですよ」

「もう沢山だ、——下手人は和助じゃない——が、お舟を庇^{かば}つて
そう言うのだろうか、こいつはお舟でもないよ」

「——」

お舟と和助は濡れた眼を見合せました。

「和助とお舟は、昨夜^{ゆうべ}別々にここを出て、お曾与を殺すつもりで

行ったんだろう」

「——」
お舟はうなずきました。

「ところが、お舟は本当の下手人を見た。背の高い男が、お曾与を殺して逃げたのを見た筈だ。宵闇よいやみの暗い中で、それを和助と思
い込んだのも無理はない」

「——」
「和助の方はお舟の出で行った血相と、あわてて帰って来た様子
を見て、てつきり下手人をお舟と思い込んだ——それに相違ある
まい」

「その通りですよ、親分」

和助とお舟は始めてホツとした顔を挙げます。

「背が高くくてちよつと和助に似た身体の男が下手人だ。そいつは、
文吉に怨うらみがあるか、お曾与が生きていては困ることがあつたんで、
そして一と月前に湯屋で勘三郎の三尺を盗んで仕度をした——
八、来い。俺には大方判つたような気がする」

平次はそこを飛出しました、——つづく八五郎。お舟と和助は
それを見送って、気まずい沈黙をつづけております。

「和助さん」

しばらく経つてお舟が口を切りました。

「」

「和助さん、——お前さんは馬鹿ねえ、——でも本当に有難うよ」
お舟は極り悪そうにモジモジする和助の側に寄って、その節高ふしだか
な手を取っております。

×

×

平次はもういちど十三屋とみやの文吉に逢って、いろいろ締め上げま
した。そして文吉が、伊丹屋駒次郎が部屋住時代に、筋の悪い借
金や、騙りかたのような事までして、遊びの金を作ったことを種に、
駒次郎を脅迫きょうはくして、お舟やお袖と手を切らせ、無理に自分の娘を
押付けていたことを白状させました。

駒次郎がお袖に充分未練みれんがあつたことは、近所の人達もよく

知っております。押かけ嫁の祝言が近くなつて、駒次郎は最後の手段を取つたのでしよう。

「それ行けッ、あの野郎だッ」

平次とガラツ八は小柳町に飛びました。ちようど外へ出ようとした駒次郎は、ガラツ八の腕力に押えられて、虫のように無抵抗むていこうに縛られたことは言うまでもありません。

縄付を役所に引渡した帰り、ガラツ八は絵解きをせがみました。「悪い奴があるものだね、親分」

「あれは馬鹿さ、——金づくで何うにもならない事があると、馬鹿はあんな事をするのさ」

「何だつて、わざわざ親分のところへお曾与が殺されたつて言つて来たんでしよう」

ガラツ八にはそれが不思議でたまらなかつたのです。

「どうせ変死と知れずには済まぬと思つたのさ、知れると、この辺あたりの事だから、俺が行くに決つてゐるじゃないか。どうせ平次の手に掛かるものなら、此方から訴え出て好い子になろうという魂こん胆たんさ」

「その辺は馬鹿じゃないね」

「どんなに器用な細工をしたところで、人でも殺そうというのは、やはり馬鹿さ」

「平次はそう言って、お舟と和助のことを考えて居ました。この二人は駒次郎の馬鹿のお蔭で、飛んだ儲もうけものをしたことになるのです。」

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

許嫁の死

初出―「錢形平次捕物百話」第九卷 中央公論社 昭和十四年八

月五日発行

底本―「錢形平次捕物全集」第五卷 河出書房 昭和三十一年七

月十五日初版

編集・発行 錢形俱樂部



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>